

私の願う未来に向けて

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科 3年 池内 美里

毎日給食に並ぶ牛乳。小学生のころの私は、特に牛乳が好きだったわけではなく、給食に出されるため、仕方なく牛乳を飲んでいました。中学校に入学すると、昼食が給食からお弁当に変わり、「ご飯に牛乳は合わない。」と言って、牛乳を注文しない友だちが何人もいたことを今でも覚えています。実施、和食が世界無形文化遺産に登録されたことを受け、学校給食が和食中心となり、「ご飯に牛乳は合わない。」という理由で、学校給食から牛乳を廃止するという決定を下した学校もあります。これは、学校給食に牛乳があって当然だった日本の給食文化を大きく変えることだけではなく、牛乳の消費量の低下に更なる拍車をかけることに繋がりがねません。ではなぜ、小学校の頃の私のように仕方なく牛乳を飲む子、ご飯に牛乳は合わないからという理由で、牛乳を飲まない子、廃止する大人がいるのでしょうか？私は、高校3年間で学び、体験したことを振り返る中で、ある答えを見つけることができました。

今から3年前、幼いころから動物が大好きだった私は、動物のことについて学びたいという思いから、神奈川県立相原高等学校畜産科学科に入学しました。相原高校では、牛やブタ、ニワトリといった家畜を飼育し、生産物の生産を行っています。しかし入学したばかりの私は食を生産すること、家畜について考えたことはありませんでした。部活動を決める時期になると、穏やかでのんびりしてかわいいという理由から、牛に興味を持つようになり、畜産部相原牛プロジェクトに入部しました。畜産部相原牛プロジェクトは、牛の飼養管理や搾乳、畑作業などを毎日朝早くから夜遅くまで行っています。この部活動への入部の決断が私の食を生産すること、家畜についての考えを大きく変えることとなりました。

現在相原高校では、ホルスタイン種2頭とジャージー種2頭の搾乳牛を飼育、牛乳の生産を行っています。しかし、これまでにはたくさんの苦勞と学びがありました。牛乳は母牛が子牛を出産することで生産することができます。そんな牛乳生産のスタートである出産に立ち会った日は、今でも忘れられません。1頭のホルスタイン種の出産が迫ってきた日のことです。元気な子牛が生まれてほしい。部活のみんなで出産を待ちますが、なかなか子牛は生まれてきません。そこで、先生がロープで子牛を引っ張ると、かわいい子牛が姿を現しました。ですがその子牛は息をしておらず、死産でした。しかし、悲しんでばかりはいられません。すぐに搾乳作業が始まります。無事に生まれてくる子牛のために、多くの牛乳が貯められた乳房はパンパンに張っているからです。しかし、搾った牛乳はすぐに廃棄となります。私はこの時、牛乳は母牛が子牛のために生産するもので、私たちは、それを頂いているということを実感しました。

しかし出産するだけでは、安定して牛乳を生産することはできないということを痛感させられる出来事が起こりました。1頭のジャージー種が出産し、明日から出荷ができることに楽しみにしていた矢先のことでした。「アルコール不安定で出荷できない。」この言葉を聞いたときはすぐに治って、出荷できるようになるだろうと思っていました。でもこの日から、アルコール不安定や乳房炎は多発し、出荷できる牛乳の量が少ないため、バルククーラー内で牛乳が凍ってしまうことも多々ありました。現在は、バルククーラーの中の牛乳が凍ってしまうということはほとんどありません。しかし、今でも乳房炎の発生が頻繁に起こります。そこで、搾乳を行う際にはゴム手袋を着用する、乳頭の汚れを拭くタオルとブレイディングを拭き取るタオルを区別するといった対策を試み、より衛生的に搾乳ができるように工夫を凝らしています。

私たちが生産した牛乳はビン詰めされ、週2回行われる正門販売や、月に2回行う畜産フェアで販売を行い、地域の方々に提供しています。相原牛乳は、低温殺菌法を採用していることから、牛乳本来の風味や栄養素の劣化を最小限に抑えることができます。そのため地域の方からは、「この牛乳はとってもおいしい。」とたくさん声を掛けてもらい、高い評価を受けています。販売活動を通して、牛乳を生産することの喜びや達成感を感じることができています。

私はこの3年間で、食を生産することの大変さや楽しさ、家畜の大切さをたくさん学び、経験してきました。スーパーに牛乳が並んでいるのが当たり前。そんな生活から、生産者の苦労が、そして牛が命をかけて牛乳を生産しているからこそ、スーパーに牛乳が並び、給食に牛乳が出され、私たちが食することができると思えるようになれました。幼いころ、給食に出されたから仕方なく牛乳を飲んでた私はもういません。今は、生産者に、牛に「ありがとう」の感謝の気持ちをもって、牛乳を飲めるようになりました。そう思えるようになると、積極的に牛乳を口にする機会も増えてきました。

私が見つけた答え。それは、私の考えの変化の中に隠されていました。それは、牛乳がどのように生産され、私たちが食することができるのかを知らない人がたくさんいるからだと思います。相原高校に入学する前の私と同じような人が今の日本にはたくさんいるのです。このような思いを持つ人がさらに増えてしまったら、ますます牛乳の消費量の低下を招くこととなります。この牛乳消費量低下という大きな壁を乗り越えるためには、少しでも食を生産する機会に触れ、家畜を、牛乳を知ることが大切だと思うのです。「牛乳のことについて多くの方に伝えたい。」そんな思いで、牛乳について学ぶための劇を製作し、地域イベントで発表を行いました。劇を通して子どもから大人まで多くの方に、牛乳に興味を持ってもらうことができました。また相原高校は、地域の方が自由に見学することができます。そのため間近にいる牛に興味津々な子どもや、搾乳の様子をじっと眺める子どもも多くみられます。

その子どもたちの真剣な顔つきはきっと明るい酪農の未来へとつながると信じています。

私の願う未来の酪農の姿です。学校給食にはいつまでも牛乳の姿があります。そして、子どもが、大人が、日本中の人々が、「ありがとう」と牛乳を飲みます。私はこの未来に向けて、残りの高校生活でも牛乳について多くの方に伝えられるような活動を続けていきます。そして将来は、農業高校の教師になりたいと思います。一見、かかわりのないように見えるかもしれませんが、私のように農業高校で学ぶ未来の高校生が、食を生産すること家畜について学ぶことができれば、もっともっと酪農の未来は明るい方向へ広がっていくと思います。私が学んだことが未来の高校生に、そして未来の高校生からより多くの人に。時間はたくさんかかるかもしれませんが、それでも、酪農の明るい未来に向けて、これからも頑張っていきたいと思います。